八、ユキと春燕

哈爾浜（ハルビン）までの川旅のさなか、三原ユキがきれぎれに語った、彼女の生（お）いたち、ハナとの出逢い、劉春燕（リウチュンイエン）との関わり、そして橋口平助との間に起こった出来事を、綴（つづ）り合わせて記すことにする。

……三原ユキの両親は、代々、徳川幕府に仕（つか）える御家人（ごけにん）だった。

ユキが生まれる十三年前、幕府は崩壊し、明治新政府の命令で、徳川家は家臣とともに静岡藩に移封（いほう）された。新たな領地の石高（こくだか）は七十万石（ごく）。江戸幕府の直轄地は四百万石であったから、土地からの収益が一気に六分の一に減った計算になる。たちまち、旗本（はたもと）・御家人と呼ばれた徳川家家臣たちは、貧窮に陥った。

ユキの実家も同様だった。ユキが生まれた頃、新しい時代に適応できず家でごろごろしていた父親は失踪し、残された母親は内職をしながら、幼い子供たちを養っていた。母親の口癖は、いい相手に恵まれないと女は幸せになれない、だった。

ユキは十歳の時、静岡市内の菓子屋に奉公に出た。店の軒先で団子を焼かされた。

必死に注文された数を覚え、団子を焼き、刷毛（はけ）で醤油（しょうゆ）を塗る。立ちのぼる煙が目にしみた。

店の向かいは人力車の車宿（くるまやど）だった。十台ほどの人力車が並べられ、人力車夫がさかんに出入りしていた。荒くれ者の車夫たちが買いに来る時は、ほんとうに恐ろしかった。

――二本な。

――五本、頼む。

――おい、六本って言ったろうが！

時たま、かわいいねえ、と言われても嬉しくなかったし、本数を間違えて怒鳴られると、泣きたくなった。

そんななかで、ただ一人、優しい車夫がいた。十五歳くらいの少年だった。

――一本、ください。

と蚊（か）のなくような声で注文し、手渡すと、物陰に隠れて、いとおしそうに少しずつ団子をかじる。

当時、幼くして奉公に出たばかりの子供は、食事と寝る場所を提供されるだけで、給金は出なかった。ただ、人力車夫は客から心づけ（チップ）をもらえる事もある。少年にとって、そんな時のささやかな贅沢が、団子を頬（ほお）ばることだったのだ。

あるとき、少年は二本団子を買って、一本を「食べな」とユキに手渡してくれた事があ

った。ユキは、少年の目の前では口をつけなかった。すぐ食べてしまうと、もったいなかったからだ。紙で包んで袂に隠しておいて、仕事が終わった夜、寝床でこっそり食べた。おいしくて、嬉しくて、涙が出た。

それからというもの、ユキと少年の仲は、急速に親しくなっていった。一緒に神社の祭りに出かけ、お守りを買ってくれたこともあった。団子を買いにきたとき、そっとお釣りを多めに渡したこともあった。次の日、団子を買いに来た少年は、お代と一緒に、髪を縛るきれいな色の組紐をくれた。

ユキが十三歳になり、初潮を迎えた五日後、十八歳になった少年がやってきた。

――少し、抜けられないか？

団子を焼くユキに、思い詰めた面差しで少年は問うた。躊躇っていると、年かさの朋輩が、

――行っておいで、ここはあたしがやっとくから。

と言ってくれた。ユキと少年の仲は、すでに店内では知れ渡っていた。頬を赤らめ、ユキは店を出た。

時間がないのか、ユキの袖を引いて小走りに走る少年に連れられた先は、写真館だった。その当時、庶民が写真撮影される機会は学校の卒業式くらいだった。わざわざ写真館で撮影するのは贅沢とされていたのだ。

数日後、送られてきた写真の裏に、走り書きがあった。

へいたいに、いきます　へいすけ

ユキは物憂げに説明した。

「彼は軍隊に取られるとわかって、こつこつ貯めたお金で、私と一緒に写真を撮ってくれたの」

それからユキは、懐から守り袋を取り出し、一枚の写真を引き抜いて、私に手渡した。

「その写真が、これよ」

その写真には、朝鮮の密陽で、地元の妊産婦を射殺して逃走した橋口平助が残していった背嚢に入っていた写真と同じく、十三歳のユキと、十八歳の橋口平助が、並んで映っていた。

平助が軍隊に召集された明治二十六年、十三歳のユキは、女衒に売られた。

ユキの母が、地元の商人の後妻となる事が決まった。相手の子供を妊娠し、周囲からは堕胎するよう強要されたが、ユキの母は頑として聞き入れず、子供を手放すことを条件に、後妻の座に収まった。

ユキは、母親が自分の身の安泰を手に入れるのと引き換えに、苦界に身を沈めることになってしまったのだ。それを、女衒から聞かされたのは、大連に行く途中、五人の売られていく娘たちとともに船で博多を出て、釜山についたその日の夜だった。

――死にたい……。

何より、母親から見棄てられた事が辛かった。自分が、この世に存在してはいけない人間であるかのように感じられ、息をするのも苦しかった。

その日の夜、ユキは、宿の裏山の木の枝に腰紐を引っ掛け、首吊り自殺をはかった。それを止めたのが、水野ハナだった。彼女は、ユキと一緒に売られていく五人の娘のうちの一人だった。

――どうも、様子が変だと思ったんだよ。

抵抗するユキを引きずり下ろし、落ち着いたのを見計らって、ハナは、彼女の髪を撫でながら、優しい笑顔で言った。

――どんなわけがあるのか知らないけど、死ぬことはないよ。悔しいじゃないか。

――あたしは、どんなことがあっても、生き抜くよ。好きなように生きてやる。

明るくそう言うハナが、ユキには眩しかった。

大連の娼館は、経営者は支那人だが、働いている女たちは、みな日本人だった。客は、支那人だったり、朝鮮人だったり、日本人だったりした。

際だって美しいハナとユキの水揚げを望む客は多かった。娼館主は、二人を競りにかけた。大連に駐在する外交官がハナを、支那人の商人がユキを、それぞれ競り落とした。

ハナが水揚げを拒否し、ユキの手を引いて逃げたのは、その時だった。

――あたしは、小さい時から、喧嘩して負けた事がないんだ。

彼女は、外交官に抱かれながら、膝で急所を三度たて続けに蹴り上げ、悶絶する相手の後頭部を蹴って気絶させた後、誰にも気づかれずにユキの部屋に忍び込み、裸にしたユキを立たせ、酒を飲みながら鑑賞している支那人商人の頭部に、拳骨を浴びせた。頭を抱えてよろよろと立ち上がった商人の股間を蹴り上げて失神させた。娼館を忍び出る間に、見張りの用心棒と出くわしたが、これもハナが股間蹴りでなんなく倒した。

ハナは、何時の間に用意していたのか、娼館の裏口に隠してあった風呂敷包みを取り出した。支那人女性の服と靴が入れてあった。服を着替え、髪型を支那ふうに結い直し、夜通し歩いた。

夜が明ける頃、小高い、なだらかな丘になった。その丘を越えれば、旅順である。日が高い間は、丘の上の林に潜り込んで眠った。ユキは眠れなかったが、ハナは熟睡した。そして夜になるのを待って歩き出し、旅順の街にたどり着いたのは、二日目の朝だった。

二人は、街外れの廃屋を見つけて、潜り込んだ。

――これから、どうするの？

ユキは問うた。ハナは答えた。

――考えてない。どっちにしても、あんなところで、客を取らされるのはいや。

――でも……。

ユキは泣き出しそうになった。

――ここで、どうやって、食べていくの？

――そうだねえ……。
ハナは、床に寝転がり、天井を見つめながら言った。
――あたしは、もともと独りで生きてきた。捨て子だったんだ。
――そうなの？
――ああ、物心ついた時には、お加世の姐貴について、盗みやらかっぱらいやら、なんでもやったよ。
――お姉さま？
――血の繋がった姉じゃないよ。あたしら不良少女の首領さ。あたしに、きんたま蹴りを教えてくれたのもお加世さんだった。あたしは、仲間のなかでも一番強くて、一人で五人の不良少年を叩きのめしてやった事もある。あたしら十二歳になったら、助平な親父にすり寄って、いざという時にきんたま蹴り上げて、お金を奪って逃げるってのをやらされるんだけど、あたしが一番稼ぎがよかったんだよ。
ハナの武勇伝を、眼を丸くして聞いていたユキは、やがて、
――だからハナさん、あんなに強いのね。私はだめ。ハナさんと違って弱いもの。
――そんなことないさ。きんたま蹴るなんて簡単だよ。あれは凄く痛いから、女の力でも十分相手をやっつけられる。今度教えてあげるよ。
お腹すいたね、食べ物もってくるから、待っていて。そう言ってハナは出掛けた。戻ってきたのは三十分後だった。肉饅頭がハナの両手に一つずつ乗っている。
――食べようよ。
ハナは、右手を差し出した。ユキは受け取ったが、口に入れる気になれなかった。
誰かの急所を蹴って手に入れた……。そう思うと、奇妙な罪悪感に襲われた。
――食べないの？
食べ終わったハナは、ユキが饅頭を持ったまま、口をつけずに突っ立っている姿に、不満そうに言った。
――苦労して、手に入れたのに。
――ううん、違うの。
ユキは慌てて首を振った。
――ハナさんにお世話になりっぱなしで、なんだか申し訳なくて。
――気にしなくていいよ。おあがり。
久しぶりの肉饅頭をむしゃぶりつくように頬張るユキを、眼を細めて見つめていたハナは、やがて口を開いた。
――言っとくけど、誰かのきんたま蹴って、手に入れたわけじゃないからね。
思わずむせたユキに、やっぱりそう思ってたのか、と苦笑して、ユキは懐から財布を取り出して見せた。大連の娼館で、急所を蹴り上げて気絶させた日本の外交官から盗んだのだと言う。
――これから、この街で生きていくのだもの。無暗に敵を作っちゃだめ。でないと、加

世姐さんみたいに、ひどいことになっちゃうから。
ハナは眼を伏せて言った。
――あんまり暴れすぎて、殺されたの。大勢に囲まれて、犯されて……。
息を呑むユキに、ハナは言った。
――それから、あたしたちはばらばらになった。途方にくれていたら、あたしの両親だという男女が現れた。貧しさのあまり捨ててしまった、悪かった、許してくれって謝られた。商売がなんとか回せるようになったので、あたしのことを探してたんだとさ。あたしとしたことが、ころりと騙されちまった。そいつら、アカの他人だったんだ。お役所で戸籍を作って正式に親子になるやいなや、あたしを女衒に売り飛ばした。そしてあたしは、こんなところに来ちまったわけさ。
――でも……。
ユキは遠慮がちに言った。
――ほんとの親に売られるよりは、ましだわ。
ハナはじっとユキを見つめていたが、歩み寄り、ぎゅっと抱きしめた。
――大丈夫。今日からは、あたしがあんたの姉さんだから。

やがてハナとユキは、ふとした縁で知り合った小間物屋の林という支那人夫婦の店を手伝うことになった。二人は、食事と寝る部屋を与えられ、親子同然に遇された。支那語を覚え、地元の人々にも溶け込んでいった。ハナは、足の悪くなった林夫妻にかわって仕入れを任されるようになり、ユキは、商品の陳列や帳簿つけなどを手伝った。
ある日、ユキが一人で店番をしていた時、一人の少女が現れた。切れ長の一重瞼で、ひょろりと細い身体つき。髪を三つ編みにし、粗末な服を着ている。
彼女は、店先に並べてある小さな装身具を見つめていた。一つひとつ手に取り、値札を見ては溜息をつく。
――您要什麼（何かお探し）？
そう声をかけると、びっくりしたように後ずさった。怯えた面差しを浮かべ、踵を返して外に出ようとする。
――稍等（待って）！
ユキは、彼女の袖を掴んで引き留めた。彼女が手にとった簪を手に取り、髪に挿してあげた。
――お代は、あるだけでいいわ。
微笑みを作ってユキは言った。少女は、無言で俯いていたが、やがて、
――ありがとう。
と、手に握りしめた銅貨をユキに渡した。その眼から涙が溢れ出していた。
娘は、ユキが挿してくれた簪を引き抜き、ユキに差し出しながら、
――何かで包んでください。

と頭を下げた。
――誰かにあげるの？
ユキがそう問うと、少女は頷いた。
――妹に。
――妹さんがいるのね。何かの贈り物？
――もうすぐ、私、家を出るから。
――奉公に出るの？
――ええ。
遠くを見つめるように、少女は言った。その眼差しに、ユキは気づいた。彼女も、自分と同様に、娼館に売られていくのだ、と。
やがて、唇に笑みを浮かべて彼女は問うた。
――あなたの名前を教えて。
――私は、ユキ。
――支那人じゃないわね。日本人（リィーベェンレェン）？
――そうよ。あなたの名前は？
――私の名前は……。
少女は、潤んだ眼差しでユキを見つめて、言った。
――リウチュンイェン。
――どんな字なの？
少女は、店先の土間にたまった土ぼこりに、指で文字を書いた。
劉春燕（リウチュンイェン）。
それから、彼女が売られていくまでの一週間。春燕は、毎日のように小間物屋に顔を出した。ハナは、仕入れで忙しく、一度店で顔を合わせたきりだったが、ユキと春燕は急速に仲良くなった。ユキがこっそり安い商品を春燕にあげていることは、林夫婦も気づいていたようだが、何も言わなかった。
一週間後、春燕は売られていった。
その日、店の前で駕籠が止まった。降り立ったのは春燕だった。細いからだにぴったりした白い胴衣、黒い緞子（どんす）のズボン、黒い布の靴。髪は、頭頂部でハサミが開いた形にする前劉海式に結い上げ、顔には美しく化粧が施されていた。
――漂亮（ピィアォリィアン）（きれいよ）、春燕（チュンイェン）。
ユキはそう言って春燕を抱きしめ、春燕は無言で泣いた。

年があけ、明治二十七年の春になった。朝鮮半島で、東学と呼ばれる教えを奉じた多数の農民が一揆を起こしているという風評が流れてきた。
旅順には、砲台を備えた要塞があり、軍艦が停泊している港もある。一揆が半島を越えて飛び火してくる事を恐れた清国政府は、要塞の守備兵を増強した。清国の官軍は、士気

の低さや、風紀の悪さで知られていた。旅順市内の盛り場は繁昌したが、街中のあちこちで喧嘩騒ぎが起こり、住民たちは家に閉じこもるようになった。

やがて、日本と清国は、それぞれ居留民保護を名目として、軍隊を朝鮮半島に送った。一揆はやがて鎮圧されたが、両国軍は引き揚げず、睨み合いが続いた。

そして七月二十五日、朝鮮半島と旅順のある遼東半島とに挟まれた豊島沖で、日本海軍が清国の軍艦を砲撃、戦端が開かれた。日本と清国の戦争とはいえ、当初、戦場は朝鮮半島に限定されていた。

旅順は、朝鮮半島の付け根にあたる部分から、西に突き出している遼東半島の最先端に位置する。その遼東半島の付け根あたりが騒然としはじめたため、品物が入ってこなくなった。小間物を商う林夫婦の店も、品物が揃わず、商売が不調になった。

そこでハナは、海を渡って西の対岸にある威海衛に行き、小間物を仕入れる事にした。その地の市場ならば、北の天津や北京から品物が入ってきているはずだ。

だが、ハナが威海衛に向かった後、日本軍は朝鮮の首都・漢城を制圧、朝鮮半島西海岸に海軍を進めた。これに対して清国は、旅順や威海衛を根拠地とするに北洋艦隊を増強、一般市民が海路を使う事を禁じた。ハナは、威海衛に渡ったまま、帰れなくなってしまったのだ。

ハナが帰らぬまま、ユキは林夫妻のもとで不安な日々を送った。九月二十一日、日本の連合艦隊は清国の北洋艦隊を黄海海戦で撃滅、制海権を把握した。ついで、陸軍は遼東半島に進撃、十一月二十一日、日本軍は旅順を攻撃した。すでに、清国軍の士気は低く一万三千の守備兵のうち四千五百が戦死した。一方の日本軍一万五千は、数十人の犠牲者を出しただけだった。一日にして旅順市街は日本軍の制圧するところとなった。

だが、市街地は制圧しても、海に面して聳える要塞は、まだ抵抗を続けていた。市街に入った日本軍は、時に、物陰に隠れた清国兵から銃撃を浴びた。疑心暗鬼に陥った日本兵たちの間に、鼻や耳を削がれた友軍兵士の生首が、市内のあちこちに吊されているという噂が拡がった。

翌日、要塞もあっけなく陥落し、戦闘は停止された。だが、市内に清国軍の残党が潜んでいるという疑惑は晴れず、日本兵たちは、家という家に踏み込み、成年男子を見つけると片っ端から射殺した。市内のあちこちで、銃声と悲鳴が耐えなかった。

ユキは、林夫婦の小間物屋で、戸に鍵をかけ、声を潜めていた。遠くに響いていた銃声と悲鳴そして軍靴の音が、次第にこちらに近づいてきた。ユキは、林の妻と抱き合い、家の主人は、唯一の武器である心張り棒を握りしめ、戸口を睨んでいた。

戸が激しく叩かれた。小さく悲鳴をあげるユキを、林の妻はしっかりと抱きしめた。戸が蹴破られた。同時に銃声がした。林の妻が絶叫した。ユキから離れ、血を流して床に横たわる夫にかけよった、続いてまたも銃声。林の妻が倒れた。

――おい、よく見ろ。

見ると、小銃を構えた若い日本兵が真っ青な顔で突っ立っていた。その後から伍長の階

級章をつけた年かさの兵士が入ってきて、若い日本兵の肩をどやしつけた。
――じじいとばばあじゃないか。弾丸(たま)がもったいねえ。
それから、ユキを見やって、唇を歪めた。
――ま、邪魔者はいなくなったのだから、よしとするか。
そして伍長は、背後を見やった。後から二人の日本兵が入ってきた。伍長は命じた。
――戸を閉めろ。鍵をしとけ。

そこまで語って、ユキは、蒼白の面差しで押し黙った。唇が細かく震え、両手をぎゅっと握りしめていた。
「快停止吧(クゥアィティインヂィーバァー)(もう、やめて)」
劉春燕(リウチュンイェン)が、眼に涙をいっぱい溜めて、ユキの肩に手をおいた。それから私とソヒョンを見やって言った。
「もう、じゅうぶん。これ以上、ユキさん、むり」
「いいえ」
ユキが首を振った。それから春燕に笑顔を向けて、言った。
「大丈夫。心配しないで」

三人の兵士が、ユキを犯している間、林夫婦を撃った若い日本兵は、突っ立ったままだった。
――橋口(はしぐち)一等卒。
伍長が言った。
――貴公、まだ童貞だったか。どうだ、この姑娘(クーニャン)相手に？
はしぐち……？
ユキは、痛む身体を動かして、頭をあげた。
小銃を構えて立っているのは、間違いなく、橋口平助だった。橋口もまた、自分の同僚が犯している少女が、ユキである事に気づいた。
橋口平助の眼が大きく見開かれた。へたへたと床に座り込んだ。
――なんだ、こいつ？
日本兵たちが口々に言った。
――腰抜けめ。人を撃ったのは初めてらしいな。
――気にするな、こんな騒ぎだ。誰も気にしやしねえ。
――黙っといてやるからよ。
やがて日本兵たちは、橋口を引きずるようにして連れ去った。最後に店を出た橋口は、振り向きざま、ユキに向かって両手を合わせた。眼からぼろぼろ涙を流しながら。
それから一日、ユキは茫然と壁にもたれて坐ったまま過ごした。眠ることもできなかった。体を貫き通した痛みと、無力感が、彼女から動く力を奪った。

そのまま翌日、日が傾きかけた頃、戸が乱暴に開かれた。
――おお、よかった。まだ、ここにいたぞ！
入ってきたのは、昨日、ユキを犯した三人だった。橋口の姿はなかった。ユキが、殺された林夫婦をそのままに動かずにいるのを見て、ほっとしたように安堵の息をついた。
――ありがてえ。おい、周。
呼ばれて入ってきたのは、旅順で評判の悪い人買いだった。
――この女だ。悪くないだろう。
――これ、上玉ね、旦那。
周は愛想笑いをして、伍長に金を渡した。日本兵たちは、逃げるように去っていった。
――你非常幸運（お前は運がいい）。
日本兵が去ったのを確かめ、周は言った。彼は説明した。
日本軍が旅順の掃討戦で、多くの民間人を虐殺したことが、外国の新聞記者の知るところとなった。慌てた司令部は、民間人の殺害を禁止し、違反した者は厳しく罰すると通達した。ユキを犯した日本兵たちは、彼女を口封じしようとして、戻ってきたのだ。
たまたま、日本語の分かる周が、その会話を聞きつけた。彼は日本兵に、自分が彼女を買って、知らない土地に連れていくから殺すのはやめてくれ、と説き伏せた。
――私、あなたの、命の恩人。
たどたどしい日本語でそう言い、周は、ユキの腕をとって立たせた。
その後、ユキは周の家に連れていかれた。家の蔵には、三人ほどの少女が、ぼんやりと座っていた。いずれも、日本軍の侵攻で家族を失い、孤児となった娘たちだった。人買いの周は、戦争のどさくさに紛れて、一儲けを企んだのだ。
二日後、周は暗いうちにユキら少女たちを馬車に乗せ、家を出た。日本軍を避け、北の海岸沿いに馬車を走らせた。道は旅順を脱出する避難民で溢れていた。
二日かけて馬車は、大連を通り過ぎ、遼東半島の付け根の営口という都市についた。その間、娘たちに与えられたのは、わずかな水と、饅頭が二個だけだった。ユキは饅頭には口をつけず、他の娘に分け与えた。
馬車が止まったのは、二日目の夜、営口の船着き場だった。昼間では軍需物資を運ぶ船が忙しく出入りしていたが、すでに夜は更け、人けはなかった。
周は馬車を降りて当たりを見廻し、
――奇怪、没有人（おかしいな。誰もいない）……
不審そうに呟いた瞬間、物陰から、一人の女が走り出た。周が振り向いた瞬間、女の体は空中に跳躍し、一回転した。鼻柱を蹴られ、仰向けに倒れた周の体に、女は着地した。右足の踵が、周の股間を踏みつけた。周は絶叫し、海老ぞりになった。両手で股間を押さえ、激痛にのたうち回った。
――好久、周大人（周さん、お久しぶり）！
二十代半ばくらいの女だった。唇が赤く、ほお骨が高く、眼は引き裂いたように鋭かっ

た。悶絶する周に近寄った。
――你記得我（ニィーヂィードゥーウオ）（私を覚えてる）？
それから、周の頭髪をつかみ、後頭部を地面に打ち付けて気絶させた。懐から短刀を取り出し、周のズボンを脱がせ、陽物をえぐり取った。血まみれの陽物を周の口に詰め込んだ。気絶していた周は、窒息して意識を取り戻し、片手で血を噴く股間を、片手で喉を押さえ、再び悶絶を始めた。
その様を見ながら、女は唇を歪めて笑った。
――我的名是、林黒児（ウオドゥーミィンシィー リンヘイアル）（我が名は、林黒児）

林黒児は、後に女性だけの義和団員・紅灯照（ホオンダアンヂアオ）を創設し、首領となった女だ。水夫の娘として生まれ、幼い頃、娼婦に売られた。やがて逃亡して雑伎団に潜り込んだ彼女は、様々な芸を仕込まれ大道芸で暮らしていたが、やがて梅花拳（メエィファチュアン）という武術を習うようになった。運動神経のよかった黒児はめきめき腕をあげ、やがて自ら流派を築いた。
当時、拳法を習っている者の間には、アヘン戦争以来、支那に進出してきた西欧諸国に反感を持つ者が少なくなかった。彼らはしばしば、キリスト教会や西洋式の工場を襲撃して騒ぎを起こした。
やがて彼らは大同団結して、西欧の侵略から支那を守らねばならないと、誓いあった。それが後の義和団に繋がる。中心にいたのは張徳成（チャンドゥーチアン）という五十歳の水夫で、林黒児の父親と同業者だった。
林黒児は、張徳成に、女性だけの結社を作りたいと申し出て認められた。彼女は、故郷の天津を出て、各地で同志を募った。応じるのは、孤児や、娼婦たちだった。その最中、かつて自分を騙（だま）して娼館に売りつた周を見つけ、復讐を果たしたのだった。
「それから、私は天津に連れていかれた。そこには、林黒児（リンヘイアル）が集めた同じような身の上の娘たちがいた。そのなかに、劉春燕（リウチュンイエン）もいたわけ」
ユキは春燕を見やりながら、私たちにそう語った。
劉春燕のいた娼館は、日本軍に荒らされ、館主は殺され、女たちは犯された。春燕は騒ぎに乗じて逃げ出し、林黒児に救われたのだ。
「でも、私は途中で追い出されたの」
ユキは寂しげに言った。春燕も苦い顔で頷（うなず）いた。
「ほどなく、私が日本人だと分かったから……自分たちの集団は漢民族しか入れないからと言われて。でも、林黒児は、私を知り合いの増世策（ツンシィーツウー）に紹介してくれた。それ以来、私は水賊・増の妻として、春燕は、紅灯照（ホオンダアンヂアオ）の幹部として、連絡を取り合って来たの」
「わかた」
ソヒョンは、短く頷き、それから問うた。
「それで、お前たち、今、何を狙ってる」
「狙ってるとは？」

「ハナさんに、何、させる気か？」
ユキと春燕の前半生が分かったことで、ソヒョンの面差しもいくぶん柔らかくなっていたが、眼差しの鋭さは変わっていない。
「まだ、私は信用されていないのね」
ユキの言葉に、ソヒョンの瞳（ひとみ）が揺れた。ユキは苦笑いして続けた。
「無理もないわ。私だって、あなたたちのこと、全面的には信用していないもの……」
ソヒョンはむっとした顔になったが、ユキは平然と続けた。
「だから、ハナさんを見つけるまでの間だけ、手を組みましょう。それから後は、お互いに個々の判断で動く。それでいいんじゃないかしら」
「そだね」
ソヒョンは呟いた。
「もし、ハナさんのため、ならない、そう思（おも）たら……」
声を低めて、十二歳の美少女は、こう締めくくった。
「私、お前たち、殺す」

結局、十二日間の川旅を経て、私たちが哈爾浜（ハルビン）に着いたのは、九月の半ばだった。もともと、この街は、松花江の北岸に拡がる草原に、数十軒の家が散在する村落にすぎなかったのだが、東清鉄道の駅が置かれてから、数万人のロシア人と支那人が押し寄せ、十二の大通りからなる商店街が造られ、満州一の大都市となっていた。
私たちが乗った船は、哈爾浜（ハルビン）の市街から一キロメートルばかり離れた、傅家甸（フージャテン）という岸辺の村に近づいた。そこは、支那人数百人が居住する、水賊の根拠地だった。
だが、岸辺の様子を見つめていたユキは、水夫に命じて船を止めさせた。険（けわ）しい面差しで、村落を凝視している。
支那式の家が軒を連ねているが、人の姿がまったく見当たらないのだ。
ユキは、春燕（チュンイエン）を手招きして呼び寄せ、小声で話しかけた。しばらくひそひそ話をかわしていたが、やがて私とソヒョンに顔を向けて言った。
「菊池さん。申し訳ないけれど、偵察をお願いしたいの」
「偵察？」
「ええ、いま、哈爾浜（ハルビン）がどんな状態なのか、見てきてくださらないかしら」
ハナと違って言葉遣いは丁寧だが、微笑みをまじりの面差しには、有無を言わせぬ圧力が感じられた。
彼女が、私たちに何かさせようとする時、必ず小柄なユキの背後で、長身の春燕が鋭い眼差しを送ってくるのも、圧力を増していた。
「わかった」
私は承知し、ソヒョンに、行くぞ、と眼で促した時、ユキが言った。
「ソヒョンを行かせるのは危ないわ」

と言い、春燕を見やった。春燕は、無言で私の傍らに立った。ソヒョンは、
「馬鹿にするな」
と、私と春燕との間に割り込もうとしたが、春燕は、わずかに顎をあげ、ソヒョンに意味ありげな笑みを送った。ソヒョンの足が止まり、呼吸が乱れた。
春燕が、ブラゴベシチェンスクの軍務知事ニコラーエフ中将を暗殺した時、居あわせたソヒョンはそれを阻止しようとして、歯が立たなかった。その時、春燕を止められなかった事が、コサック兵による支那人虐殺を引き起こした事も、ソヒョンの胸の裡でわだかまっている苦い思いを甦らせたのだろう。
「ソヒョン」
私は、肩を震わせて、春燕を睨む少女を、なんとか落ち着かせようとして言った。
「저는 괜찮아요（私なら、大丈夫だ）」

私と春燕は、質素なロシア服に着替え、船を下りた。
傅家甸の村は、無人だった。時折、コサック兵とすれ違う以外は、まったく人の気配がない。
空き家の庭で、ウォッカを酌み交わしているコサック兵たちがいたので、
「ここの住民はどうしました？」
と問うてみると、支那人はみな逃げたと答えた。残っているのは、朝鮮人と、わずかな数の日本人だという。
とりあえず、市街地に出てみることにした。
哈爾浜の街の中心は、停車場のあるマチゴ地区だが、商店や民家に囲まれた丘の上に、ロシア正教会の尖塔が聳え、この街が、清国の領土でありながら、ロシアの勢力圏に含まれていることを、その偉容が物語っていた。
川沿いの商店街を歩いていて、ふと、洗濯屋の看板が目に入った。半ば開いた扉のない部では、広い台の上に白布が被せられ、東洋人らしい男が火熨斗をかけている。庭には、大量の洗濯物が物干し台に並べられていた。
春燕が、私の顔を見つめながら、あの男に声をかけたら？　と言たげな面差しで、頭を店の内部に向けて振った。私は頷き、店に入った。
「Добрый день（こんにちは）」
ロシア語で声をかけると、火熨斗をかけていた男は振り向いた。四十前くらいだろうか、薄い髭をはやしている。男は問うた。
「조선인（朝鮮人か）？」
私は首を振り、
「저는 일본사람입니다（私は日本人だ）」
そう答えると、
「日本人か」

訛(なま)りの強い日本語で答え、握手を求めてきた。
「日本語ができるのか？」
そう問うと、彼は、
「少し、だけ」
と笑った。
彼は、朝鮮の元山(ウォンサン)という所で日本人と組んで商売をしていたのだが、うまくいかなくなり、一攫千金(いっかくせんきん)を狙って哈爾浜(ハルビン)に渡ってきた。最初は細々(ほそぼそ)とやっていたが、八月あたりからロシア軍襲来の報に怯えた支那人たちが一斉に街を捨てて逃げ出した。ブラゴベシチェンスクでの支那人虐殺の噂が伝わっていたのだ。もう潮時(しおどき)か、と引っ越しを考えていたところ、新たにやってきたロシア軍から、洗濯の注文が殺到し、おかげでおおいに繁昌していると、男は饒舌(じょうぜつ)にしゃべった。
「私、名前、崔(チェ)。あんたは？」
「菊池です」
と名乗ると、
「菊池さんか。面白いな」
「面白い？」
「うちで、日本人、働いてる、その人も、きくちさん」
「ほう、日本人が、この店で」
「うちのきくちさん、いま、ロシア軍の屯所に、洗濯物届(とど)けてる。夕方、帰ってくる」
「では、お邪魔だろうから、夕方、また来るよ。ぜひ、そのきくちさんに会わせてくれ」
そして私は、自分はロシア語を研究するためシベリアに来て、今回の戦乱に居合わせる事となった。帰国したら本を書くつもりなので、いろいろ聞かせてほしい、と頼んだ。
崔は二つ返事だった。
「わかた。お酒、飲もう。御馳走、する」
私は店を出て、外で待っていた春燕と並んで、傅家甸(フージャテン)へと引き返した。
ユキとソヒョンは、すでに船を上がり、水賊が隠(かく)れ家(が)に使っている民家に入って待っていた。洗濯屋の話をすると、ユキは、
「だったら、私も一緒に行くわ」
と言い出した。
「菊池さんの妻ということにしてちょうだい。相手が本物の日本人だと、春燕やソヒョンじゃ具合が悪いから」
「ちょと、待て」
ソヒョンが口を尖(とが)らせ、春燕を睨(にら)みつけた。この女と二人きりで待っていろ、というのか、と言いたげだった。
「では、ソヒョン、あなたは一緒にいらっしゃい。春燕は、ここで留守をお願いしたいけれど、いい？」

ユキがそう言うと、春燕は頷いた。ユキはソヒョンに向かい、
「あなたは、私たちの小間使いということにしておいてね」
と言った。ソヒョンは不服そうだったが、おとなしく従った。

日が傾き始めた頃合いを見計らい、ユキとソヒョンとともに崔の洗濯屋に向かった。
「おお、菊池さん。いらっしゃい。奥さんも一緒か」
崔は笑顔で言いながら、私たちをなかに招じ入れた。テーブルに、ウォッカやワイン、チーズ、ハムなどの前菜が並んでいる。
「きくちさん、まだ、帰てこない。でも他の日本人、呼んだ」
部屋には、二人の男がいた。一人は森という元陸軍軍曹、一人は沢田という時計修理工だった。はじめまして、と挨拶しながら彼らの目は、久しぶりに見る母国出身の美人、すなわちユキに注がれていた。
席につくと、崔は台所で料理に腕を揮い、ソヒョンが手伝って給仕役を務め、テーブルではもっぱら、私とユキ、二人の日本人がおしゃべりに興じた。
「どちらから、おいでになったのですか？」
森という元軍人が問うた。私は答えた。
「半月前まで、ハバロフスクにおりました。そこから川をくだって当地に至り、列車で斉哈爾にいる知り合いを訪ねるつもりだったのです」
「それは難しい」
時計修理工の沢田が言った。
「一応、斉斉哈爾行きの列車は動いてはおりますが、頻繁に馬賊の襲撃を受けていましてね。果たして出るかどうかは、駅に行ってみないと分からないし、襲撃を受けたら途中で引き返してしまう事も多い。哈爾浜と斉斉哈爾を往復して商売をしている知り合いがいるのですが、仕事にならないとこぼしてましたよ」
「それは残念だ。なんとかなりませんか」
沢田は、首を横に振って答えた。
「陸路を行く手もありますが、清国の警察も軍隊も逃げてしまって、治安はひどく悪いのです。私は、お薦めできません」
「困りましたね」
ユキが真顔で問うた。
「これだけ大勢ロシアの兵隊さんがいるというのに、馬賊ごときに手を焼いているのですか？」
「いや、なかなか侮れない馬賊でしてね」
森が言った。
「あちらに出たかと思えば、今度はこちら、まさに神出鬼没です。率いているのは数十騎にすぎませんがが、駆け引きが巧みで、尻尾を出さない。ロシア軍も手を焼いている」

「しかも頭目は、若い女というじゃありませんか」
沢田が言った。私とユキは息を呑み、瞬きを止めて沢田を凝視した。彼は気づかぬげに続けた。
「彼らのやり口も鮮やかなもので、列車が駅に停まっている間に、機関車に忍び込み、運転手や機関手を脅して引きずり出し、爆弾を使って破壊するんです。客車には手をかけないし、女子供は絶対に殺さない。支那人の間では、神様扱いされています」
私とユキは目をあわせた。
ハナに間違いない……。
「その馬賊は、どのあたりに出没するのですか？」
ユキが、動揺を抑えながら問うた。森が答えた。
「主に哈爾浜と斉斉哈爾の間の鉄道ですな。以前、ロシア軍は瑷琿から斉斉哈爾との間に軽便鉄道を敷こうとしていたのですが、その女馬賊の妨害で断念したくらいです」
瑷琿の郊外の鉄道工事現場で見た、颯爽と馬をあやつって鉄道資材を強奪し、コサック兵の銃撃をかいくぐり逃走したハナの姿が、私の脳裡に甦った。二十歳のハナが、ロシア軍の鉄道建設の野望を止めた。その事実に胸が熱くなった。
ふと、部屋の入口で、焼き上がった鶏肉の皿を乗せたお盆を両手で持ったソヒョンが、眼にいっぱい涙を溜めて立ちつくしているのが、眼に入った。
偶然、今の話を聞いて、感動したのだろう。瑷琿郊外での襲撃現場には、彼女も居合わせていたのだから。
私と目が合うと、ソヒョンは袖で涙を拭いて叫んだ。
「皆さん、ごちそう、だよー」
ソヒョンは笑顔を作り、明るい声で焼いた鳥をテーブルに置いた。
「召し上がれ」
その時、
「遅くなりました」
と家に入ってきた男がいた。二十歳半ばくらいのおとなしそうな顔立ちの青年で、頬から顎、鼻の下にかけて鬚を生やしている。
「おお、きくちさんか」
台所から崔が出て来て、青年を出迎えた。それから私を見て、
「彼が、噂のきくちさん。うちの店員です」
「きくちです」
青年はぺこりと頭を下げた。崔は続けた。
「元山で商売やっている時、うちの前で行き倒れになっていて、助けたです。山で頭を打って、記憶ぜんぶ、なくしたらしい。可哀想だから、雇たら、真面目な働き者。ここに来る時も、一緒に、来て貰たです」
青年は照れくさそうに聞いていたが、

「崔さん、ロシアの隊長さんから頼まれ事がありました」
と告げた。崔は、別室で聞こうといい、私たちに、ごゆくり、と言って、青年とともに去っていった。
食卓に眼を戻した時、私の隣りに坐っていたユキの手が、細かく震えているのが眼に入った。
ユキの眼が大きく見開かれ、虚空を凝視している。
食事を終えた後、私たちは辞意を告げて、店を出た。沢田と森は反対の方角に歩いていった。
二人の姿が見えなくなり、私は、「行こう」とユキとソヒョンに声をかけ、傅家甸へと足を向けた時、ユキの膝が崩れた。
眼から溢れ出た涙が頬をつたい、地面に落ちた。両手が大地を掴んでいた。
「どした？」
ソヒョンが駆け寄り、訝しげに問うた。
ユキは、顔をあげ、唇を震わせて言った。
「平助が……」
「平助？」
「あの男……橋口平助よ」

「間違いないわ」
帰りに雇った馬車のなかで、ユキは、時折、涙を零しながら語った。
「鬚で人相が変わっていたけれど、あの橋口平助よ。まさか、生きていたなんて……」
そう言って両手で顔を覆い、またも泣き伏してしまった。
ソヒョンは、何か言いたげに私を見た。
水野ハナが橋口平助のことを、ユキを犯した兵士の一人として追っていた事や、多くの女を騙した挙げ句、調布村村長の娘・秀子と釜山に駆け落ちし、その秀子も捨てて密陽に遁走し、盗みに入った家で妊産婦を射殺、山に逃走して虎に食われて死んだとされている事は、まだ、ユキには話していない。
果たして、今、その事を告げるべきかどうか、私には判断がつきかねた。
「ユキさん、よかたじゃないか」
ソヒョンが笑みをつくって、ユキの肩に手を置いた。
「ユキさんの、大事な人、生きてた。なぜ、名乗らない？」
「名乗れやしないわ」
ユキは顔をあげ、顔を顰めて言った。
「私は今や、水賊の首領の妻なのよ。名乗ったところで、どうにもなりはしない」
溜息をついて、ユキは口を鎖した。そのまま傅家甸に戻り、春燕が待っている隠れ家に入った。台所と食堂の他に二部屋あり、私はソヒョンと、ユキは春燕と同じ寝室を使うこ

とになっていた。
「どする、菊池さん」
寝室に入るなり、ソヒョンは問うた。
「びくりした。まさか、橋口平助が、こんなとこに、いた」
「そうだね」
「ハナさん、知(し)たら、ここ来る」
ソヒョンは眼を輝かせて言った。
「ハナさんの耳に、この事入るよう、言いふらすの、どう？」
「言いふらす？」
「そ！」
ソヒョンは、身を乗り出した。
「そだ、ユキさんに、話(はな)そ。ユキさんの水賊に、あちこち、言いふらさせる。ハナさん必ず来ると、そうユキさんに言えばいい」
「しかし……」
私は腕組みして言った。
「ハナは、橋口平助を憎んでいる。必ず、橋口を殺そうとするだろう。そうなった時、彼女を止められるかな……」
「止める必要、あるか？」
ソヒョンはきょとんとして言った。
「あの男、朝鮮人の女の人、殺した。お腹に赤ん坊いる女の人、殺した」
それから、ぞっとするほど冷たい声で言った。
「殺されて、当然」
その言葉と裏腹な、穏やかそうな面差しに、私は何も言えなかった。
翌朝。
食堂に四人が集まっての朝食が終わった後、ソヒョンはすべてを話した。
聞き終わって、ユキは茫然と顔を強張(こわば)らせ、しばらく、言葉も発せない状態だった。
「ほんとうに……」
やっと口を開いたユキは、嗄(しわが)れ声で問うた。
「平助がそんな事をやったの？」
眼からみるみる涙が溢れ出した。さらに、ユキは問うた。
「ほんとうに、ハナは、平助を殺そうとしているの？」
「ほんとうだ」
私は頷(うなず)いた。
「彼女は、ユキさんの仇(かたき)を取りたいと願っている。必ず、ここに来るはずだ」
「でも……」
ユキは、躊躇(ためら)いがちに言った。

「ハナが平助を殺しちゃったら……それを止められなかったら……」
私と同じ懸念を、ユキも抱いていた。ソヒョンが言った。
「平助、ここに住めばいい」
先ほどと違う事を平然と言った。
「私たち、平助、守る。大丈夫」
それからソヒョンは春燕を見遣った。春燕は、ユキに向かって頷いた。
「そうね……」
ユキは、唇を噛みしめるような面持ちで考えていたが、やがて口を開いた。
「それしか、ないわね」
その日の夕方、私はユキやソヒョンと一緒に、崔の洗濯屋を訪ねた。
「おお、菊池さんか」
満面の笑みで出迎えた崔の背後では、橋口平助が忙しく火熨斗がけをしていた。
平助を見詰めて、店に入るのを躊躇うように足を止めたユキを、そっと促して、私は店に入った。
「実は、きくちさんにお話ししたいことがあるのだが……」
平助が、火熨斗がけの手を止めて、こちらを見た。ユキが、大きく息を吐いた。
私は言った。
「仕事が終わったら、うちに来ていただけませんか」
一時間後、私たちは、不安そうな面差しの平助を連れ、傅家甸の隠れ家に戻った。
食堂のテーブルに座らせ、私は、ユキを指して言った。
「すみません、昨日は嘘をついていました。彼女は、私の妻ではない。そして、彼女は、あなたの事を昔から知っています」
困惑する平助に向かって、私は続けた。
「そして、あなたはきくちさんではない。あなたの本名は橋口平助さんです」

「わ、私は……」
私が、すべてを打ち明けた時、橋口平助は、床に座り込んで、号泣していた。
「なんてことをしちまったんだ……そ、そんな非道なことを……」
ユキも、両手で顔を覆って泣き、春燕はその肩を抱いて慰めていた。
ただ、ソヒョンだけは、スカートの裾を両手でいじりながら、苛立った面差しだった。
「平助さん」
ソヒョンが口を開いた。
「お前と、一緒に、ユキさんに、ひどいことした井口虎吉、ハナさん、彼に、どんなことしたか、教えようか？」
息を呑む平助に、ソヒョンはぶっきらぼうに言った。
「きんたま、潰した。そのあとに、菊池さん、そいつの頭、撃った」

平助は、私を凝視した。恐ろしい怪物を見るような、その眼差しに耐えられず、私は俯(うつむ)いた。ソヒョンが、平助に向かって怒鳴った。

「お前、きんたま、潰されたくないなら、いう事、きけ！」

橋口平助は、床に突っ伏して、呻(うめ)いた。

「ユキ……」

ぼろぼろと涙を流していたユキは、平助に自分の名前を呼ばれ、さらに号泣した。

「許してくれ……」

「あんたは、悪くない！」

ユキは、平助の頭をかき抱いた。自分の胸に、彼の顔を押しつけるようにして言った。

「あんたは、悪くないから、生きて！」

平助は、顔をあげた。救いを求めるように、ユキを見詰めた。その傍(かたわ)らから、ソヒョンが冷たく言った。

「お前、密陽(ミリヤン)で、お腹に子供いる、女の人、殺した」

顔をこわばらせた平助に、十二歳のソヒョンは言った。

「平助、お前、悪い」

お前、悪い。

ソヒョンが、橋口平助に放った一言が、私の脳裏に木霊(こだま)していた。

日清戦争で台湾に出征した時、私は幾人かの命を奪った。戦場で、敵兵を撃った。嘉義城では、罪もない親子を撃った。

俺は悪かったのか……？

戦うことが、国のためだと教えられた。日本が戦争に勝利することが、同胞すべてのためだと鍛えられた。

そして私は、幼い少女を殺した。

「やめて！」

平助の頭をかき抱(いだ)きながら、ユキは懇願するように言った。

「お願いだから、今はやめて……もう、言わないで……」

「そんなに、その男、好きか？」

ソヒョンは軽蔑した眼差しで言った。

「ええ……」

ユキは顔をあげて、ソヒョンを睨(にら)みつけた。眼からぼろぼろ涙を零(こぼ)しながら、言った。

「好きよ……」

唇を噛(か)みしめ、ユキは叫んだ。

「子供にはわからないわ」

「씨발놈아(シーバルロマ)（てめえ！）」

ソヒョンが絶叫した。

「비켜（どけ）！」

ソヒョンは、ユキに駆け寄り、突き飛ばした。ユキが床に倒れた。ソヒョンは座っていた平助の胸ぐらを掴み、その股間を爪先で蹴った。平助は呻き声をあげ、両手で股間を抑えて、突っ伏した。

「別价（やめろ）！」

春燕が、ソヒョンに駆け寄り、平手打ちを浴びせた。

「自大的孩子（生意気な小娘が）！」

（つづく）